水に流す

市川　聡

2015年5月29日、口永良部島の新岳が噴火しました。自宅に居た私は、ちょうど口永良部島の反対側だったので、全く気がつきませんでした。町の防災無線が妙に間延びした口調で「口永良部一島が一噴火一しました一。ただ一ちに一避難一して一くだ一さい。」と放送したものだから、最初は避難訓練の試験放送を間違って流したのかと思ったくらいです。いつまでたっても試験放送と言わないので、テレビをつけたところ大変なことになっていることがわかりました。テレビで繰り返し放映される爆発の瞬間の映像では、火砕流が港に迫っているようにも見え、多大な人的被害が出たのではないかと青くなりましたが、その後の報道でけが人はでたものの全員命に別状はなく避難したことがわかり、胸をなでおろしました。1日も早い皆様の帰島を祈るのみです。

当日は自宅のＰＣで仕事をしていたのですが、東に向いた窓から見える景色は、青空が広がり、海が青々と輝くばかりで、口永良部島から避難されて来た方が「絶好の噴火日和だった。」とおっしゃるような、いつもと変わらぬ穏やかな時間が流れています。この時、外にでて見れば良かったのですが、9000メートル立ち上った噴煙柱は、黒々と西の空を覆い、島の反対側からも見ることができたそうです。

翌日西部のツアーで安房のお客様をピックアップして北周りで西部林道を目指しました。窓を開けて走っていると、椨川あたりから鼻をつく硫黄臭がしはじめました。清浄な春牧にいた私は、噴火の影響は全くないと思っていたので、様子の違いに驚きました。宮之浦のＹＮＡＣカフェで淳子さんに、すごいにおいで驚いたと話すと、「あらそう？」という反応。前日からこのにおいに包まれてきた鼻は既に状況に慣れてしまっていたようです。

永田を過ぎて西部林道に入ると樹木の葉の上に灰がかぶり白くなっており、半山の近くまで行くと路面に灰が堆積してタイヤの跡が残っています。車から降りて森に入りました。風が吹くとカーテンのように梢から灰が降り、砂嵐のように迫ってくるのがわかります。マスクをしていても息苦しく目がちかちかとしました。

ところが午後になり一雨降ると状況は一変しました。瞬く間に灰は叩き落され空気が清浄になっていきます。硫黄臭も消え、いつもの屋久島に戻ってしまいました。文字通り屋久島の雨は全てを水に流してしまいました。

屋久島では大雨が降ると川は濁るのではなく、最終的にはむしろ澄んできます。全ての汚れを海に押し流してしまうからです。水に流すというと問題をうやむやにしたままなかったことにしてしまうというネガティブなイメージもありますが、屋久島の場合そんなことも含めて全て洗い流すという力強さがあります。

脳科学によると、あったことを克明に記憶し続けると漠然としたイメージとしての思い出ができなくなるそうです。淡い初恋の思い出も、詳細を忘れるから甘酸っぱいのです。こうして慣れ、水に流すことで、人は明日に向かって進んでいくことができるのでしょう。砂漠の国の諍いは水に流すことができないのでやっかいです。何でも水に流すことができる屋久島って、素敵ですね。屋久島の雨に川に打たれて、これまで胸に溜め込んだわだかまりを水に流してみるのはいかがでしょうか？

5月29日、私は種子島で行われる種子屋久観光連絡協議会の総会に出席すべく、宮之浦港から10:00発のトッピーに乗りこんだ。同じ会議に出る副町長や役場の職員も私の座席の前方にいた。

間もなく…本当に出港して間もなくのことだった。役場の職員の何名かが突然同時に携帯を手にして立ち上がり、緊迫した面持ちで電話をしているのが見えた。彼らが窓から外を眺める姿を見て船内の空気が一気に緊迫した。「エラブが噴火した」と他の乗船客が口々に言いながら写真を撮り始めるまでに2分はかからなかっただろうと思う。私も振り返って窓の外を見ると、矢筈岬の向こう側からキノコのような噴煙がもくもくと上がっていた。その噴煙は青々とした空に突如として現れた巨大な生き物…本物のゴジラのように見えた。

これはただ事ではないと背筋が凍る思いがした。『民宿口永良部』の貴船さん、口永良部島ガイド協会の若者たち、棒踊りを披露してくれた子供たち、毎年モニタリングをしていたサンゴ群落のことが頭をよぎった。

宮之浦港を出港して5分、今すぐに屋久島に引き返してほしいと思った。きっと副町長をはじめ、屋久島の人たちは同じ思いだったのではないだろうか。しかしトッピーは、種子島を目指して走り続けた。そのうち会議が中止になったとの連絡が入り、関係者は全員種子島から次の屋久島行きの便で帰ることになった。

船を待つ間西之表港の待合所で副町長らとテレビのニュースに見入っていた。口永良部島島民全員の無事が確認されたという報道にそこにいるみんなが胸をなでおろした。

≪初めの一歩≫

口永良部島との関わりは、1987年2月私が初めて屋久島を訪れた時に始まる。当時東京に住んでいた私たちは海の近くで暮らしたいという思いで移住する場所を探していた。

候補地のひとつである屋久島に滞在した何日間かのうちのある日、ボートをチャーターし口永良部島近海でダイビングをした。帰る船の舳先に乗り、雲一つかかっていない屋久島奥岳の写真を撮りながら、「屋久島が呼んでいる」と感じた。口永良部島と傾きかけた太陽に背を押されたように私はそこで屋久島に移住することを決めた。この時はダイビングだけで、口永良部島には上陸をしなかったが、その年の10月には屋久島に住んでいたので初めの一歩を大きく踏み出した日だった。

≪屋久島太鼓≫

初めて口永良部島に上陸したのは翌年7月、屋久島太鼓の遠征の時だった。移住をしてから、これも東京暮らしの頃から憧れていた和太鼓のチームに入り、何ヶ月かの見習い練習の後のデビューがこの口永良部島での奉納演奏だった。当日暑い中、口永良部島の大人や子供たちが金峰神社までの急な坂をみんなで太鼓を運んでくれたのを思い出す。その後、これまで5回ほど太鼓演奏をしに口永良部島に行っている。

中でも2010年10月の遠征では、金岳小・中学校の校庭に全島民が集まったのではないかというほどの大盛況だった。さらに青年と子供たちが踊ってくれた棒踊りの、息の合った迫力満点の演技に大変感動したのを思い出す。

噴火が収まり、島の人々の生活に日常が戻ったら是非また太鼓と棒踊りで寿ぎたいと思う。

≪ＹＮＡＣ口永良部島研修≫

1999年11月24・25日はＹＮＡＣの研修で口永良部島を訪れた。当然ＹＮＡＣは野外活動総合センターなので、山から海まで隈なく歩き回り走り回り潜りまわった。それまでは幾度となくダイビングで行っていたが、森をじっくりと見たことがなかった。季節になると屋久島からも竹の子を採りに行くという話を聞いていたので、竹林ばかりだと思っていた私にとっては、南東部に広がる照葉樹の原生林のすごさにはかなり驚かされた。

実は口永良部島は、海も森も火山もダイナミックでかなり面白いところだった。

≪海中公園基礎調査≫

口永良部島は、2007年に全島およびその地先海面が国立公園に指定された。その海中公園指定のための予備調査が2003年7月29日から4日間行われたが、私も協力をさせていただいた。屋久島のサンゴ調査でお世話になった熊本大学の野島先生、鹿児島大学の四宮先生、出羽さん、学生さんとＹＮＡＣスタッフの高橋宏美の8人でひたすら潜りまくった。

貴船さんが経営する『民宿口永良部』のおいしい夕食の後、海談義にふけっていると婿殿こと山口さん（民宿口永良部の娘婿）が加わってきた。ずいぶんお酒が回ってきたころ山口さんから「このような調査になぜ地元の自分たちが呼ばれずに屋久島の松本さんが参加しているのだ？」と絡んで（？）きた。それに対して、私は、「僕らは自主的にいろいろな調査をして情報を発信してきた。それが評価されて呼ばれている。だから、文句を言う前にどんどん自分たちで調査をして発信してみたら。」とアドバイスをした。その後、2008年国際サンゴ礁年の鹿児島イベントで、口永良部島ガイド協会（2007年結成）として口永良部島のサンゴを紹介した素晴らしいパネル展示を見せていただいた。今や多方面にわたって調査を行い、素晴らしいデータを蓄積している。

≪口永良部島ガイド協会≫

2007年3月に国立公園に指定されることもあり、口永良部島の若いガイドさんから観光協会に入会したいのだがどうすればいいのだろうかという相談を受けた。

2007年2月19日私が口永良部島に赴き、お話を聞くことになった。貴船さんの息子さん（森くん）が始めた『民宿夕景』で山口さんや貴船さん、峯苫さんなど今の口永良部島をリードする若い方々とお話をすることができた。

是非、ガイド組織を立ち上げて、口永良部島からどんどん情報発信をしていくようアドバイスをした。口永良部島ガイド協会が立ち上がり、島の情報、夜光貝細工、ガイドツアーの紹介、ブログなど立派なホームページを立ち上げて活動されている。
http://kerabu.eco.coocan.jp/index.html

実はこの口永良部島行きには、アイヌのシャーマンであるアシリ・レラさんも同行していた。前日、我が家に泊まっていたレラさんが突然「山が噴火している」と言い、口永良部島のことかなと皆で話をしているところに、私が翌日口永良部島に行くことになっていると言うと、彼女は「気をつけなさい」ではなく「私も行く、行かなければならない」と言い出したのだ。

その時はなぜだかはよく分からなかったが、断る理由もないので一緒に行くことになった。成り行きで仕事を休んで妻も同行した。その時も口永良部島の新岳は火山性地震が増加していた。金峰神社の正面と裏でレラさんは祈り、アイヌの鎮魂の儀式を行った。

≪ダイビングクラブ　口永良部島遠征≫

2003年に発足したＹＮＡＣダイビングクラブでは、毎年口永良部島ツアーを行っていた。しかし参加者はダイビングそのものよりも『民宿口永良部』でのまったり感が好きで、毎年参加しているというのが正直なところだろう。まず太陽丸の朝便に乗るとお昼に着く。そのまま民宿に入り、タケノコのてんぷらとそうめんで腹ごしらえ、ダイビングを終えると温泉に浸かり、夕食前にエラブオオコウモリを見に行き、その後は大量に持ち込んだビールで宴会となる。婿殿（山口さん）が採ってきた新鮮な魚を余すところなく使ったおいしいフルコース料理をいただく。翌日は午前中のダイビングを終えると温泉に浸かって宿に戻り、いつものカレーライスランチ。そしてダイビング船の船長からいただいたイセエビをお土産に屋久島に帰るのがいつものパターンだった。

2010年11月8・9日のツアーは、帰りの船が欠航してしまったので、のんびりと島一周を楽しんだ。そのとき初めて古岳に登ったのだが、あちこちの岩の割れ目から水蒸気が噴き出していた。それはかつて大噴火をしたであろう山の名前と様相だった。

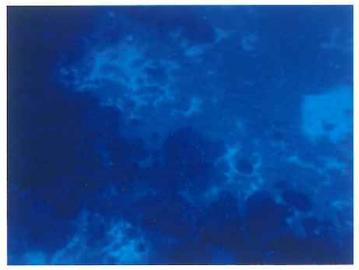
2011年のツアーはラッキーなことが重なった。ひとつはエラブオオコウモリを間近に見ることができたこと、もうひとつはその帰り道でなんと『サソリモドキ』を発見したのだ。とにかく恰好いいその姿にＹＮＡＣ虫好きナンバーワンの池田君と大騒ぎをして写真を撮った。硫黄島で死体は見たことがあったが生きているのは初めてだった。また2m級のマダラエイに出会ったのもこの時だった。とにかくこの年はラッキー続きの口永良部島ツアーだった。

≪モニ1000　サンゴ調査≫

私は2004年から続けてきたモニタリング1000（環境省事業）というサンゴ調査で、口永良部島の寝待と岩屋泊のサンゴを見続けてきた。サンゴがどれくらい生息しているかという調査であるが、大隅諸島19地点の調査ポイントの中で寝待が57%岩屋泊55%と被度が上位1・2位を占める程のサンゴが生育している場所だ。

寝待のポイントは、海底から温泉が噴き出し、まわりには湯の花が雪のように堆積している。昨年2014年8月3日に新岳が中規模の噴火をした後であったためか11月21日に調査をした際は湯の花が例年とは比べ物にならないほど大量に海中に舞っていた。

鹿児島の錦江湾では桜島の噴火が続いたため、火山灰がサンゴに堆積してかなりのサンゴが死滅したという報告を聞いている。今回の口永良部島新岳噴火の際、向江浜では火砕流が海岸まで達したが、東海岸にある寝待・岩屋泊への火砕流の被害はなかった。しかし噴煙が9,000メートルにも及んだ今回の噴火による火山灰がサンゴにどのような影響を及ぼしたかを早くこの目で確かめてみたい。



過去に幾度となく噴火を繰り返した火山島ではあるが、そのたびに人々やサンゴや動物たちはそれを乗り越えてきた。この火山活動もやがて収束し、また新たな生命の営みが再開されるであろう。そうやって今まで口永良部島は生きてきたのだ。

これは誇りです。　松本淳子

昨年８月の新岳噴火後「備えがしっかりできていたから」今年５月 29 日の噴火時に迅速な避難ができた。

口永良部島についてそれは間違いないことだと思う。そしてその備えとは非常持ち出し品の準備はもちろん避難場所の吟味と繰り返し行なわれた避難訓練のお陰であろう。

その後聞いた話では、集落から一人離れて住んでいた方の救出に消防団員が船で向かったとか、学校ではトイレに行く場合も常にヘルメットを持っていたとか、先生方の車も生徒全員を乗せてすぐに避難所に向かうことができるよう校門に向けて出船駐車していたとか、住民は皆日々噴火を想定して暮らしていたのだ。

いつおきるかも知れない噴火に備えて不安を募らせるばかりではなく、おきた時にどう振る舞うかといったことが住民一人ひとりの中できちんと考えられていたのだろう。

噴火後YNACにはマスコミからの電話がひっきりなしにかかり「気象庁の映像とは別の、誰かが撮った写真か動画はないか」「永田の知り合いを紹介してくれないか」と言っていた。

実家や友達から「大丈夫？」という電話やメールが多くきた。みなテレビで「屋久島」という言葉が出たから心配してくれたのだった。主人の実家は神戸、わたしの実家は宮城県なので繰り返し流されるテレビ映像に不安をかき立てられ、居ても立ってもいられなくなる気持ちはよくわかる。

そして午後５時過ぎ、全員無事に宮之浦港に上陸したという報を聞き安心した。一人の犠牲者もでなくて、本当に良かった。

地元自治体の屋久島町も口永良部島の噴火を想定し、住民と観光客全員を一度に避難させることができるよう町営船の定員増加許可を取っていた。

だから「フェリー太陽」はあの日の昼過ぎには波を切って噴煙の上がる口永良部島に向かうことができたのだ。鉈折岳のうしろから黒灰色の噴煙が高く上っているのが見えた宮之浦では、あらかじめ決められていた避難所での受け入れ準備がすぐに始められた。

今回の避難がスムーズに行われた要因として「地域コミュニティ」の力があったからだとも言われている。

４年前の東北大地震の際に南三陸町のある地域から集落全体で避難した人々が、避難所においても食事は自分たちで調理するということを決めた。支援物資のパンや弁当が不足していたわけではなかった。しかし辛い現実の中でこそ、当番の女性たちがその日のことを互いに話し、泣いたり笑ったりしながら作った料理を「食堂」と決めた部屋で一緒に食べるということ…失われた町の記憶を互いに身を寄せ合うことで守ろうという自然な思い、人はこうやって支え合っていくのだと知った。更にこのようなコミュニティを支えるためには、それを取り囲む周辺地域のコミュニティの力も重要である。

隣人を敵にしてはいけないのだ。

口永良部島には「おったてぼうこう」というのがあるらしい。これは「男立て奉公」と書くらしく、頻繁に行なわれる草払いや清掃などの地域の奉仕作業のことだそうだ。一緒に自分達の住む場所をより美しくしていこうという作業であるが、顔合わせの場所でもあり情報交換のできる機会でもある。そういう作業や日々の営みの中で消防団の人たちは「噴火があった時、皆が無事に避難するためには」と考えてくれていたのであり、誰がどこに住んでいて昼間はどこにいる、ということまで具体的に知っていた。それは大きな家族のような安心感のある関係だ。

縁あって住んでいる場所で自然災害に遭うことも、また今回のようにすぐ近くで起きる可能性は誰にだってある。それでも人はそこに住んでいるしこれからも住み続ける。口永良部島の方々も「早く帰りたい」と言う。火山島で暮らすことについては、いつも噴煙を上げている桜島などは大先輩だし、後輩火山は日本列島のあちらこちらにある。

屋久島や口永良部島は不便や不足を言ったらきりがない離島であるが、そこに住んでいる人々は、雨も風も地震も噴火も自然なのだという思いがあり、備えとして予めできることがあればそれを行うことは当然のことだが、太刀打ちできない場合は身を寄せ合ってやり過ごすしかないということを知っている。

予めできることとは自分だけのシェルターを作ることではなく、地域や隣人たちとのよりよい関係をつくることだ。

とは言うものの、口永良部島の噴火で避難して来た人々にも不安な夜や先行きが見えない怖さだってあるに決まっている。でもそこで泣き言を言わずに身を寄せ合っている人達に対して「夜はぐっすり眠れましたか」とか「これからの生活に何か不安はありませんか」などと尋ねることはもう止めよう。この後は「屋久島での避難生活は楽しかった」と言ってもらえるような支援ができたらいいと思う。

だから今こそ「屋久島に行ってみたいと思っていたけれど、噴火は怖いし、避難している人達が気の毒なので自粛しようか」と考えている方々には、屋久島が災害とどう向き合っているのかを見てもらいたいし、屋久島旅行をすることによって口永良部島を支えるメンバーの一員になっていただきたいと思う。

５月 29 日以降、ツアーの問い合わせやマスコミからの電話にわたしははっきり言っている。誰も失うことなく迅速に避難できたこと、避難者をスムーズに受け入れられたことは、町民としての誇りです、と。

ところ変われば団子も変わる
屋久島のかからん団子

福留　千穂

サイクリング屋久島のエイドステーション。選手を元気づけるかからん団子。残りわずか！！

生まれも育ちも鹿児島県の私の好物は、サツマイモですが、実は、郷土のお菓子【かからん団子】にも目がないのです。

子どもの頃、母に作ってもらおうと【かからん葉】を採りに出かけ、きれいな新芽を採ってきたら、蒸し上げた団子にがっちり引っ付いて、はがしにくかった思い出があります。

春先、野道を散歩し、瞬時に【かからん葉】を見つけ、タラの芽よりも「採らなきゃ！」という衝動にかられます。

そんなかからん団子好きの私が、屋久島に来て驚いたこと、それは、かからん団子が鹿児島県本土のものとは違うことでした。

中の団子が団子ではない！餅並みの粘り気！そして、ヨモギがぎっしり！草餅の緑色を通り越して黒々した緑色！

「んだもしたん！どした、うんめもんかよ！！」

（※おいしさのあまり、鹿児島弁でおいしさの感嘆の声が出てしまいました）

鹿児島弁で「～の」は「～ん」となり、【かからの葉】という意味の【かからん葉】。また、トゲがあるので【触らない】と言う意味でも【かからん】葉。正式名は、【サルトリイバラ】または【サツマサンキライ】。ツル性植物です。

ハマサルトリイバラ。小学校で使ったカスタネットぐらいの大きさ。

この植物、生えてる場所によって、葉の様子が違います。

海岸沿いには、ちょっと小型で厚みのある葉の【ハマサルトリイバラ】。潮風にさらされても耐えられるように丈夫になっています。

「これだと葉っぱ2枚で、団子を包む感じで、はがしやすいかも。」

里にある【サルトリイバラ】と【サツマサンキライ】。ぱっと見、同じように見えますが、落葉性なのがサルトリイバラ。里にあるのは、常緑性のサツマサンキライが多いように見えます。

街路樹に絡み付くサツマサンキライ。身近にあるから使いやすい。

「これが一番手に入りやすい。そして、１枚でも団子を包めるぐらい大きい。」

標高が高い所には、小さい葉を付けるサルトリイバラ。里の葉の大きさと比べると、１／４ほどしかありません。

「一口タイプの小さめ団子になってしまうなあ。」

さらに標高が高い所の【ヒメカカラ】。花之江河や黒味岳で、足元に茂っています。１cmにも満たない小さい葉！

「小さすぎて、これでは団子を包めない！」

（ヒメカカラはサルトリイバラとは別の種ですが、カカラつながりで・・・）

全部、葉を見るそばから団子のイメージが浮かんできてしまいます。

鹿児島の団子【かからん団子】。いい葉を使ったなあ、と改めて感心しながら、お客様に、葉を示しながらかからん団子について熱く語っていると、なんと！他の県でも、この葉を使って団子にしていることが判明！

調べてみると、サルトリイバラの葉ではさむタイプの団子は、昔から各地で食されてきたようです。

呼び方も様々で、三重の【イバラモチ】、徳島の【ムギダンゴ】、京都では【サンキラダンゴ】、愛媛など【カシワモチ】と呼ぶ地域もあるそうです。

そして、葉にはさまれた団子も様々。鹿児島や屋久島は、餅米の粉を練った団子で、餡子をくるまないのが一般的。屋久島のものは、餅米の粉にヨモギの新芽と黒糖を混ぜて練っています。鹿児島のものは、餅米の粉にさらし餡を混ぜて練ります。同じ鹿児島でも異なります。三重のイバラモチは、小麦粉を練ったものに餡子をくるむそうです。

様々な呼び名のある【かからん団子】。共通しているのは、端午の節句の時期に作られること。全国的に広く知られている【柏餅】と同じ感覚のようです。

ところ変われば団子も変わる。かからん団子への想いも全国へ広がります。屋久島のかからん団子、ふるさとのものとは違ったおいしさがあります。ぜひ旅のお供に、お土産に。

「うんめごあんど～！屋久島んかからん団子！」

妄想ひとり旅@グアテマラ共和国

渡部　幸

中米・グアテマラでYNACがエコツアーを行ったら･･･という楽しい妄想旅行。今回はマヤ文明最大にして最古の神殿都市遺跡を含むティカル国立公園からお届けします。

まず、ティカル国立公園の場所を確認しておきましょう。

日本から飛行機を乗り継ぎ20時間前後で首都グアテマラ・シティへ。そこから再び飛行機を乗り継ぐこと1時間（ツワモノ向けの夜行バスもあります。うまくいけば8～10時間くらい）で北部の町フローレスへ。さらにバスに揺られること1時間半で世界遺産・ティカル国立公園に到着です。

国名は古代マヤ語で「木のたくさんあるところ」。確かにティカル遺跡の神殿から望む熱帯林は国名そのものを表しているように思います。

なんだか西部照葉樹林の森と似ている気がします。

標高はどちらも0mから200mまでと同じくらいですが、ティカル地方の気温は25度を下回ることはなく、平均すると30度くらいです。私が住んでいたときは46度まで上がる日もありました。年降水量はティカル地域が1500mmほど、西部地域が2000mmほどとあまり変わらないように見えるのですが、乾季（11月から4月）と雨季（5月から10月）がはっきり分かれているので、半年の間に一気に降る印象があります。基本的には温暖で雨の多い地域の常緑広葉樹を中心とした森ということで、見た目が似ているのかもしれません。でも中身はだいぶ違っています。

ティカル遺跡

屋久島西部照葉樹林

ティカル遺跡の敷地内にはグアテマラの国木・セイバ（バオバブやドリアンの親戚筋にあたる）もあります。マヤの時代から聖なる木とあがめられ、マヤの宇宙観を表現している大樹。なぜ聖なる木となったかというと、この木の開花具合で、その年の雨季の雨量予測ができたからだそうです。ジャングルの中で飛び抜けて大きなセイバの木は、まさしく王者の貫録十分。世界樹といわれるのも頷けます。板根も見事です！

屋久島の森の王者「縄文杉」と比較してみると、台風の影響をさほど受けずにすくすく育ってきた木、台風と戦いながら生き抜いてきた木の違いが良く分かるのではないでしょうか？

そのまま、セイバを見上げてみましょう。枝にはびっしりとエアプランツが張り付いています。通常の植物は、土から養分・水分を吸い上げて成長をするのですが、このエアプランツは、土に植えなくても株表面から空気中の水分を吸収して成長します。そのため、Air Plants = 空気植物・空中植物と呼ばれています。まるでコケ植物のようですね。

セイバとエアプランツ

屋久杉とコケ植物

そうそう、セイバを見上げて思い出しました。グアテマラにはこんなものもいます。足元気を付けてくださいね。

毒蜘蛛・タランチュラ！

クモ目オオツチグモ科に属する800種以上のクモの総称。分布域が広いので、北米では「タランチュラ」、南米やオーストラリアでは「バードイーター」、東南アジアでは「アースタイガー」、アフリカでは「バブーンスパイダー」などと呼ばれているそうです。ところ変われば！というとこは「かからん団子」の話（p5　参照）と良く似ていますね。

運がよければ**ハキリアリ**が葉っぱを運ぶシーンが見られるかもしれません。彼らは強靭な顎で葉っぱや茎を丸く切り取り、地面の中の巣に持ち帰って、噛み砕き菌糸を植えます。そしてきのこを育て、自分たちや幼虫の餌にします。

･･･また、屋久島を思い出しました。西部の森で見かけるマテバシイとキクイムシの戦い。種類は違えども、木と昆虫の戦いは世界中で行われているのですね。

あ、カラスバトの声が聴こえます！！　いやいや、ここはグアテマラ。

あの声はホエザルでしたね。よく似ています。しかし、ホエザルよりもよく見かけるのはクモザルです。

食痕を発見したら、なんだかお腹がすいてきましたね。私たちもお昼にしましょう！　もちろん、グアテマラ国民食のトルティージャ（トウモロコシ粉の薄焼きパン）とフリホーレス（黒豆の塩煮）。これに焼きバナナとケソ（フレッシュチーズの一種）、クレマ（サワークリームみたいなもの）が付くのが一般的です。

←時計回りに
スクランブルエッグ
フリホーレス
焼きバナナ
ケソ
クレマ

トルティージャ→

あ、民族衣装（ウイピル）に目がいきますか？　伝統文化が色濃く残るこの国では、今も昔もマヤ系の先住達が色彩豊かなウイピルを身に纏って生活しています。実はこのウイピル、それぞれの居住地区によってデザインが違うので、一目でどこの村の人か分かるのです。「あの制服は○○高だ！」のような感じですね。また、彼らは365日その衣装で過ごしているので、私たちからすると、毎日カーニバル♪のように見えてしまいます。

そんなグアテマラ・ティカル遺跡の中には歴史だけでなく、たくさんの自然の不思議も転がっています。標高0mから1936mまで亜熱帯から亜寒帯まで広がる屋久島と標高0mから4220mまで熱帯から寒帯まで広がるグアテマラ。東経130度30分の屋久島と西経90度22分のグアテマラはほぼ地球の反対側といってもいいほど距離は離れているのですが、ゆっくり見渡してみると共通点もちらほら見つかります。

遠いようで近しい国・グアテマラ共和国。この妄想ひとり旅がYNAC公認海外エコツアーとなるようじっくりと準備を進めていきたいと思います。

Vamos a GUATEMALA♪　Nos miramos pronto!!

グアテマラでお会いしましょう!!

遣唐使と屋久島

小原比呂志

遣唐使がいきなり遭難

屋久島は文献資料の極端に少ない土地で、歴史を知りたいと思っても、一筋縄ではいきません。平安時代から中世にかけては、法華宗が布教してくるまで資料はほぼ皆無に近い状態です。

ところが面白いことに、日本書記などの古代の資料になると、邪久、掖玖、益救など、ヤクの名がちょくちょく出てくるのです。

そんなわけで、それらの資料について書かれた本などをいろいろ調べていたところ、日本書記に７世紀の面白い記述があるのを発見しました。653 年に第二次遣唐使船団が派遣されています。ところがこのうち正史の１人高田根麻呂の乗船した２号船が、「薩麻之曲竹島之間」で「船合没死」つまり沈没して乗組員は死亡したという記事が出てくるのです。

薩麻（薩摩国）の海域で竹島・曲島といえば、現在の薩南諸島の竹島と、馬毛島ないしは熊毛郡の名がすぐに思い当ります。「曲」は「くま」と読むことになっているそうですが、いずれにしても、この遣唐使船は、竹島と種子島かその属島の馬毛島の間で 120 人ほどを乗せて遭難したようです。

鹿児島から屋久島に渡るとき、錦江湾から外洋に出ると、波があれば 3000 トン級のフェリー屋久島２でも大きく揺れ始めます。こんなところで沈没したらどうなるだろうと、船室の救命胴衣の棚をちらりと眺めたりするわけですが、まさにその状況でこの遣唐使船は遭難して海の藻屑となったのでしょう。

そんな時代のそんな事故がなぜわかったのでしょうか。これがなんと生存者がいたのでした。沈没した船から、門部金（かどべのかね）ら５人が、板にすがって辛うじて竹島に流れ着いたというのです。

彼らは竹島だけに密生しているカンザンチクを束ねてイカダを組み、ルートは不詳ながら６日６晩かけて自力で本土に生還したようです。この件で門部金は朝廷から褒賞をもらっています。なんともすごい男たちです。

ハイリスク・ハイリターンな遣唐使

日本古代史のなかでも、一つのクライマックスを形作っているのが、８世紀の奈良時代です。701 年、大宝律令が発布されます。律は現在の刑法、令は行政法と民事法のことで、現在まで続く日本の国の基本形です。

この時期、貴族の子弟や学僧などの若きエリートたちは、あこがれの先進国、唐で、語学をはじめ文化や政治、軍事、最先端の産業技術を学ぶため、こぞって遣唐使船に乗り組みます。ハイリスクな船路に挑み、ハイリターンの大陸留学に向かったのです。

遣唐使は、630 年から 838 年にいたる 200 年の間、実際に出港したものだけで 15 回派遣されています。朝廷から任命される正使と副使を中心に総勢 600 人程度の訪問団が編成され、基本的には４隻の遣唐使船団で、難波津の住吉大社から唐を目指しました。

ところで、第２次遣唐使のもう１人の正史、吉士長丹（きしのながに）率いる１号船は、やはり 120 人ほどを乗せ、おそらく値賀（五島列島）から済州島、朝鮮半島の百済の多島海沿岸あたりを経由して、山東半島の登州へ渡るという、オーソドックスな「北路」を使って長安入りしています。

ところが高田根麻呂らの２号船は、なぜか九州南岸に向かっています。２セットの遣唐使がそれぞれ別ルートを取ったのか、時化に遭い２号船だけはるばると流されたのかは不明です。しかしこの後、九州から直接海を渡る南路や、琉球や大隅諸島を経る南島路を使うケースが次第に増えることを考えると、あえて南ルートを取った可能性もあるようです。

遣唐使の成功率は、何を成功とするかにもよりますが、７～８割程度だったようです。使節は外交上の見せ場である元日朝賀に間に合わせるという日程上の都合から、しばしば夏の台風シーズンに出発しており、難破の危険は常にあったようです。加えて平底の遣唐使船は外洋航海船として性能が低く、時化に遭うと帆柱を切り倒すしか方法がないため漂流しやすかったとされます。

そのためいくらハイリターンとはいえ、遣唐使に任命されても、必死に抵抗したり逃亡したりした人もおり、派遣が中止になったケースもありました。

阿倍仲麻呂、吉備真備　エリートたちの旅路

717 年に出発した第８次遣唐使には、留学生として阿倍仲麻呂、吉備真備、玄昉、井真成（西安で墓誌が見つかる）などの若き俊英が参加していました。海況も良かったようで、この船団は４船とも往復に成功しました。

吉備真備はこの時 21 歳。阿倍仲麻呂は 19 歳。船団を見送り、唐で留学生活に入ります。阿部仲麻呂はなんと科挙に合格し、唐の宮廷で官僚として活動を始めます。

17 年に及ぶ留学生活を終え、734 年、第９次遣唐使の帰路の便で吉備真備と玄昉は帰国の途につきます。ところがこの船団はことごとく難破してしまい、彼らの乗った１号船のみが、「多褄嶋（たねがしま）」に帰着します。その後無事帰朝します。吉備真備、この時 39 歳でした。

この時朝廷は、不比等の息子たち藤原四兄弟が政権を掌握し、藤原氏の最初の栄華を迎えていました。しかし、３年後の 737 年、天然痘の大流行で４人ともあっけなく死んでしまい、政権を動かす政治家・官僚が激減してしまいます。

このときに生き残った有力者が、橘諸兄（たちばなのもろえ）でした。彼は帰国した吉備真備と玄昉を抜擢し、政権を立て直します。この橘諸兄の政権は 18 年間続き、741 年の全国の国分寺制定、743 年巨大公共事業として東大寺建設、墾田永年私財法制定、752 年の大イベント大仏開眼など、賛否分かれる様々な政策を実施します。吉備真備も橘諸兄の右腕として、辣腕を振るったでしょう。

その後、藤原四兄弟の長男武智麻呂の嫡男、藤原仲麻呂が台頭して人事権を握り、橘諸兄を次第に圧倒、専横します。750 年に吉備真備は九州へ左遷されてしまいます。

752 年、57 歳の吉備真備は、第 10 次遣唐使の副使に任命されました。大使藤原清河、副使大伴古麻呂とともに、再び唐へ渡ります。この時、かつての同僚阿倍仲麻呂と再開します。55 歳の阿部仲麻呂は唐の高官として重用されていましたが、この機会に帰国することにしました。

第 10 次遣唐使、帰路屋久島へ

この時、藤原清河の要請をうけて、唐僧の鑑真が日本へ同道します。鑑真は中国律宗の指導的僧侶で、戒律を授けること、つまり僧としての厳しいルールを指導し、資格認定する立場でした。この時日本では戒律を授けられる高僧がおらず、仏教の風紀を正すため、戒律僧として招聘されたわけです。

鑑真はそれまでに５回渡海を企て、失敗していました。この時も玄宗皇帝から正式な出国許可が下りず、正史藤原清河の船ではなく、副使である大伴古麻呂の２号船に乗り、最後の挑戦にでたのです。

歌人である阿倍仲麻呂は、旅立ちにあたって古今和歌集に望郷の絶唱を残しました。

天の原　ふりさけ見れば春日なる　三笠の山にいでし月かも

彼との別れにあたっては王維が、行方不明の報に際しては詩仙李白が、それぞれ仲麻呂に贈る詩を詠んでいます。

753 年 11 月、船団は蘇州を出港します。この４隻は、それぞれ苦難の旅路をたどりました。

第10次遣唐使のルート（南路、南島路）

１，２，３号船は南島路と言われる島伝いルートを取ったようです。まず３号船が、次いで１・２号船が、阿古奈波（沖縄）に到着します。風を見てそれぞれ出港しますが、藤原清河と阿倍仲麻呂の１号船は港で座礁し、そのままベトナムまで漂流してしまいます。乗組員は多数がそこで殺されたものの、藤原清河と阿部仲麻呂は生き延び、のちに唐へ生還します。しかし二人ともそののち帰国はできませんでした。

４号船は行程不明ながら、のちに薩摩の石垣（旧頴娃町）へ帰り着いたようです。

大伴古麻呂と鑑真が乗り組んだ２号船、そして吉備真備と、第９次遣唐使で戒律僧の招聘のために渡唐し 20 年ぶりに帰国する僧普照とが乗り組んだ３号船。これこそが、屋久島に到来し、歴史の事跡を残した遣唐使船でした。

12 月７日、おそらく新暦の１月頃になりますが、まず吉備真備の３号船が沖縄を出て７日後、屋久島に到着します。北西の冬風にさらされる屋久島の海岸は激しく荒れることが多く、その際は風下にあたる南東側の港のみが使えるようになります。伝説によれば、３号船は原のトロオキの滝の入江に停泊したとされています。

冬に高速船ジェットフォイルで屋久島を訪れた際に、宮之浦港へ入る予定が、海上の天候不良のため安房港入港に変更されたという経験のある方もいるのではないでしょうか。

トロオキはまさに冬場のための港です。切り立った海岸が続き、入港場所を見つけるのが難しい屋久島ですが、背後にそびえるモッチョム岳の大岩峰が、海上からは良い目印になります。この入江は、夏は太平洋からのうねりが打ち込み、また滝となって流れ込む鯛之川の水量によっては海面が怒涛の滝壺と化しますが、冬場には静かな停泊場所となります。天気のいいトロオキの海岸から、吉備真備や普照はモッチョム岳を見上げ、岳神に感謝の意をささげたでしょうか。

このモッチョム岳の麓にある村邑、原（はるお、はら）は、当時屋久島の南半分を占める護謨（ごむ）郡の郡司（こおりのつかさ）の所在地だったという説があります。島内に２社しかない益救神社が現在ここにあることも、関連がありそうです。もしトロオキが郡司の公式な港であれば、役人の便宜が期待できたでしょう。

ともあれ屋久島で一息いれたであろう３号船は、おそらく大宰府へ向かい出港します。ところがここまで来ておきながら漂流してしまい、黒潮に流されてしまいます。しかし幸い紀州の牟婁崎に漂着、平城京に無事生還します。

少し遅れて沖縄を出港した大伴古麻呂と鑑真の２号船は、７日かかって奄美群島、七島灘を越え、12 月 12 日屋久島に到着します。この時の寄港地は、トロオキから少し西にある小さな入り江「ミヤカタの浜」だったとされています。

この入り江は、実際に行ってみると非常に小さい上に付近の海は岩礁だらけで、とても遣唐使船が停泊できる場所には思えません。なんらかの屋久島側のナビゲートがあったのでしょうか。しかしトロオキと同じように原には近く、郡司を目ざしたのかもしれません。

５度に及ぶ渡日の失敗の苦難で盲目となっていたといわれる鑑真は、苦労の果てにたどり着いた屋久島で、常春の風を感じたり、美味しい水を思う存分飲んだりできたでしょうか。

２号船は穏やかなミヤカタの浜を出帆し、大宰府へ向けて出港しますが、次の日風雨に襲われます。午後になって山影を見出し（おそらく笠沙の野間岳）秋妻屋浦（旧坊津町秋目浦）へ入港。ここからは順調に、６日間で有明海を経て大宰府へ到着し、754 年平城京にはいります。

大歓迎を受けた鑑真は、できたばかりの東大寺で戒壇を設け、聖武天皇など皇族や貴族に戒律を授けるなど、戒律師として重きをなします。日本の僧侶はそれまで自主的に出家した私度僧のみでしたが、これ以降は戒律を守る者を僧として認定するようになりました。つまり鑑真は、日本の僧の国家資格を確立したわけです。

歴史の闇の中へ

さてこの時期、実は屋久島在住者が１人だけ歴史に登場します。「加理伽（かりか）」という人物です。

702 年、朝廷は薩摩・大隅に勢力を持つ隼人を攻略するため、種子島・屋久島をまとめて「多禰嶋（国）」を設置し、この海域の制海権をおさえました。さらに 709 年に薩摩国、713 年に大隅国を置き支配をすすめます。

720 年大規模な反乱を起こした隼人に対し、大宰府が軍を送りこれを鎮圧します。この時点で薩摩・大隅のハヤトはついに大和朝廷に対し完全に屈したのでした。

733 年、朝廷は、多禰嶋の安志託（あした）に「多禰後国造」を、そして益救郡の加理伽（かりか）に「多禰直」を与えます。国造（くにのみやつこ）や直（あたい）という姓は、地方の行政や祭祀の長の地位を示します。安志託は種子島の、加理伽は屋久島の長だったと考えていいかもしれません。

他にも種子島・屋久島の合計 1116 人が姓を与えられています。当時の両島の人口ははっきりとはわかりませんが、現在両島合わせて 46000 人、仮に平安時代はその 1/20 だったとすると 2300 人です。ほとんど２人に１人が姓を与えられています。隼人の反乱後、いっそうの体制固めが図られたのでしょうか。

そして２年後の 735 年、大宰府は南島に案内板を建て、さらに 19 年後の 754 年に再整備をしました。「島の名前、停泊できる港、給水場所、主要な寄港地への里程、遠望できる島の名」が記されたもので、おそらく種子屋久、奄美、沖縄へと続く南島のルート整備事業でした。

なお喜界島で発掘された城久遺跡群は、大宰府がこの時期に建設した出張所ではないかと推定されています。

このように、海外に向けて積極的だった日本ですが、この後次第に引きこもるようになり、平安時代になると公式にはすっかり内向的な性格になってしまいます。辺境の記事が減り、この時期から南島の影は薄くなり、屋久島の名もその後 500 年間、歴史の闇にほとんど消えてしまいます。歴史というものは、権力中央が残すものだと実感します。ただ記録に残らない民間の動きはいろいろと続いたようです。

加理伽の次に歴史に名を現した屋久島人は、実に 860 年後、1592 年の文禄の役で種子島軍に加わった宮之浦の五右兵衛、1597 年慶長の役の同じく宮之浦の水手五右衛門、そしてあの泊如竹、という順になります。

参考文献

鹿児島県の歴史 2011 山川出版社
鑑真幻影　中村明蔵 2005 南方新社
鹿児島の湊と薩南諸島 2002 吉川弘文館
日流交易の黎明　谷川健一扁 2008 森話社
〈流求国〉と〈南島〉－古代の日本史と沖縄史　来間泰男 2012 日本経済評論社
屋久町郷土誌　第４巻 2007
屋久島歴史小年表　山本秀雄編 2007 生命の島
三国名勝図会
種子島家譜
Wikipedia

台風史の謎：鎌倉時代、「神風」は２度吹いたのか？

佐野良介

■台風史の謎：神風＝台風？！

「台風」という言葉は、意外と新しい。気象観測がスタートした明治末、英語の「タイフーン」が「颱風（※戦後に「台風」）」となった。では明治以前の「台風」は、当時の日本人はどう考えていたのか？日本史にどう記録されていたのか？11 世紀頃の平安時代には、「源氏物語」「枕草子」等で「野分（のわけ）」と呼ばれていた[1]。鎌倉時代の台風は、「2 度の元寇の際、元軍を壊滅させた“神風”」である。「台風は 2 度起きた」これが戦中・戦後の歴史学者の定説であった。

だが、最近の元寇研究により、「1 度目の台風はなかった」可能性が高い事がわかってきた。元寇の台風の真実を追う。

■1 度目の「神風」の基本イメージ

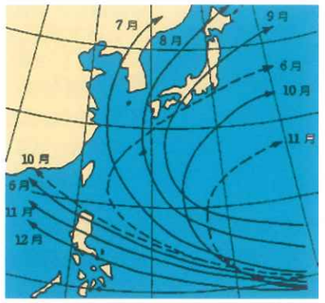
モンゴル帝国フビライの命による日本遠征は 2 度。1 度目は、1274 年 10 月 20 日（文永の役）。元・高麗の連合軍、4 万の兵 900 隻の軍船が博多湾に上陸した。見慣れぬ武器、集団戦法などに九州の武士達は苦戦し、大宰府まで撤退。翌朝、武士達は異様な光景を目にする。元軍は、一兵も残らず一夜にして引き返していた。不可解な事件だが、日本側の各資料より、暴風雨（神風）が元船を壊滅させたと信じられてきた。

■1 度目の神風はなかった？！

①季節上台風はこない可能性が高い。

この 1 度目の「神風」定説に気象学者が異論を唱えた[2]。1 度目の 10 月 20 日は、現在の太陽暦で「11 月 26 日」。

台風は晩秋、初冬にも発生する。ごくまれに太平洋で発生した台風が九州に接近することもある。だが、統計的に見てほぼ 0 回だ。1981-2010 年の 30 年間に、北九州に接近した「11 月」の台風の平均値は「0,0 回」。下の図 1 の「11 月の台風の主な経路」を見ても、日本をそれることがわかる（気象庁 HP より）。



台風の月別の主な経路
（実線は主な経路、破線はそれに準ずる経路）

②台風以外の「冬の嵐」説

服部氏は、台風以外の気象現象が起こったではないか？と考える。

「11 月末」、冬型低気圧や寒冷前線の通過により、台風並みの強風が吹くことがある。また北九州を寒冷前線が通過した後は、通常、冬型の気圧配置になり、北西の風が吹く。博多から朝鮮半島へは向かい風。当時の航海術と帆船では、容易に帰れないであろう、と推測される。

③神風が壊滅させたのではなく、元軍の自主的な撤退。

今度は、元・高麗軍側の歴史資料から、撤退理由について迫ってみよう。「元史」には、「矢が尽き、侵略先で軍が補充できない」等、軍事上不利になったためと記載されている。その後、撤退途中で「嵐」にあったと記されている（「高麗史」）。

以上を総合すると、元・高麗軍は軍事力不足で撤退した。その途中で台風よりも威力の弱い風雨に遭った[3]。この「弱い嵐」は撤退理由と関係ないことがわかる。よって 1 度目の神風はなかった。

■弘安の役の台風の記録

2 度目の元寇、1281 年元軍は総兵 14 万、全 4400 隻の水軍を先発隊、後発隊にわけ出発させる。6 月 6 日まず高麗発の「東路軍」900 隻の軍船が博多湾にあらわれる。日本の武士達は、戦術などを変え入念な準備をしてきた。高さ 3 m程の「石塁」が行く手を阻み、また射程距離の長い弓矢攻撃に、元軍は上陸できなかった。ひとまず、壱岐まで撤退し、合流する予定の水軍（中国南部発の江南軍）を海上で待つことにした。7 月ようやく江南軍が合流。7 月 30 日。ついに総攻撃をしかけた元軍を暴風雨が直撃した。この台風の猛威に元軍の大半の船が壊滅、約 7～10 万もの兵が溺死したといわれている[4,5]。

弘安の役の台風は確かにあったようだ。太陽暦で 8 月に相当し、台風シーズンだった。元側、日本側の史料に九州地方を大型台風が襲った様子が記録されている[6]。こうして元寇は 2 度も失敗した。

■台風余話（おまけ）

ちなみにこの台風の推測を、我々になじみ深いあの真鍋大覚教授（1991 没）が行っている。縄文杉を「樹齢 7200 年と推測した人」である。真鍋氏によれば、水没した江南船を破損させるほどの風速などを復元・推計したところ、「最大瞬間風速 54m/s, 中心気圧 938hPa の台風」だとしている[7]。今の気象庁の基準では、「猛烈な台風」である。これが妥当な数値かどうか今後の研究の進展を見守りたい。

---

[1]：「“台風の語源”. トクする日本語. 日本放送協会（2014/9/22 日.

[2]服部英雄（2003）「歴史を読み解く；さまざまな史料と視角」青史出版

[3] 網野善彦 1974「蒙古襲来」小学館

[4]ＮＨＫ高校講座日本史(平成 26 年度)「Ｅテレ第 12 回２章武家社会と生活文化のめばえ　モンゴル襲来」

[5] 池田栄史「長崎県松浦市鷹島海底遺跡調査の歩みと今後の可能性」

[6] 元の歴史書「元史」に被害の様子がある。広橋兼仲の日記「勘仲記」に京都に「暴風大雨」があり、北九州から広範囲におよぶ暴風大雨があったことから台風だと推察できる。…wikipedhia「元寇」

[7] アジア水中考古学研究所 HP「文永弘安の役の概要」2015

いつの日か、誰かの庇（ひさし）に

樫村精一

大学時代に「精液検査の被験者」になったことがある。「1975年以降の生まれの男子の生殖能力」の調査だった。東邦大学主催の全国調査で、協力すると¥5000-貰える。1週間禁欲を命じられ、食事や睡眠には制限がなかった。

当時、私は愛媛大学に在籍していた。構内には、他校の教授や研究員のための宿泊棟があった。我々は実験時刻を告げられ、試験管を持たされ、宿泊棟の個室に案内される。そこで自主的に精液を試験管に入れ、検査室のドクターに渡す。決して漏らしてはならない。

ドクターは精液の全体量を調べ、うち数滴をガラス板に落とし、観察する。そして「どうぞ」と言って、被験者に顕微鏡を覗かせ、精液の状態を解説し、評価してくれた。

0.1㎜単位の碁盤目模様がついたガラス板の上で、自分の精子がNHK教育番組のように動く。目盛のおかげで、面積当たりの精子の数や、精子の直進スピードがわかる。

「君は自然妊娠が難しいと思うよ」と、ドクターは私に言った。事実、愛媛大学の全被験者のうち、液量・精子数・運動速度など、全ての検査項目で、私はブービーであった。

とくに「高速直線運動率」というものが悪い。顕微鏡で見る私の精子はグルグルと同じ場所を巡っている。つまり「卵子めがけて直進！」というのが他人より少ない。

落胆は無かったが「結婚しない方がいいかな」と思うようになった。「気にすること無いよ」と皆が言ってくれたが、「そうだね」と返事しつつ、（アレを見て、ああ言われたら、きっとアンタも考えが変わるよ）と思っていた。

8年前、重症肺炎に罹った父は、高濃度酸素吸入を受けながら「サイダーが飲みたい」と言い、私に抱きついて、「がんばれよ」と呟いて息を引き取った。もし孫がいたら、もう少し違う目で私を見て、何か別なことを呟いたと思う。父の死の10日前、母の死に際に、私は間に合わなかった。

「一人っ子」で、「鍵っ子」だった私は、身内がいなくなっても何とも思わなかった。全く自由、全て自分のものである。つまり、自分の死後に、誰かに何かを残せない。誰かに感謝したりされたりすることもない。

もしも自分だけの人生なら、他人から見れば、この世に在っても無くても同じである。

自分を顧みて、結婚に向いているとは思えない。だから、「自分だけの人生」の最後を想像してみたけれど、なんだかバカバカしくなってやめた。ボロを出さないように仕事を楽しもうと決めて、色々な試行錯誤をしているうちに、「田村咲子」という名のゲストが島にやってきた。

私は、この5～6年、「思い出より経験」をモットーに、自然解説に加えて、地図やカメラの使い方、野外調理器具などについての説明をしているが、この説明で初めて対応したゲストが、咲子だったような気がする。彼女はきちんと経験を修めて、友人に「写真、上手だね」と褒められるようになった。これは嬉しかったらしい。

この時の出会いをきっかけに、付き合うようになった。結婚前に「子供は難しいかも」と言うと、「そのときは、たくさん旅行をしよう」と返されて、ずいぶん救われた。結婚後しばらくして、産婦人科のアドバイスで、胚培養を試みて失敗。まだ諦めてない、けど期待が少し薄れたころ、入浴中の私の所へ、咲子が検査薬片手に突入してきた。

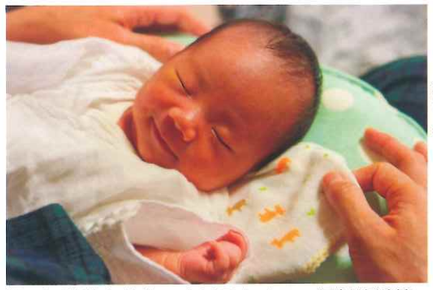
そこから先、出産に向けて体調が変わるのは妻である。私はただ、普段通りに暮らした。「良きパパ」についての話があれば読んでみる。妻のお腹を撫でる。掃除や家事を手伝う。産婦人科受診に付き添う。けれど、何にしても、私は晩春のオス鹿のように、ただボーッとしていた。

5月2日深夜0時2分、つまり5月2日になってすぐ、娘が生まれた。「佳苗・かなえ」と命名。字画は大変良い。素直に育つ「佳い苗」たらん事を。私は出産に立ち会えず、生まれて10日後の5月12日、初めて娘を抱っこした。毛並みの良い子だな、と思った。少し、手に力が入った。

咲子と私で、この子の庇になる。小さな苗が自分の力で伸び、美しい花を咲かせ、実り多い晩年を迎えられるよう、二人して精一杯、両親の努めを全うしようと思う。

生まれた直後。

2838gでした。



生後十日目。

親に保護欲を芽生えさせるための、反射的微笑。

蟲部（むしぶ）～イキモノたちはおもしろい　生き物大好（バイオフィリア）き　池ちゃんのマニアックコラム～

第2回　吸血動物ヤマビル、愛され爬虫類ウミガメ

池田　裕二

【ヤマビルだって生きている】

5月、新緑がピークをむかえ、快適なトレッキングシーズンとなる。

森では様々な花が咲き、ヤクシマザルは子育てのために新緑の柔らかい芽を求めて群れで移動する。里ではメタリックブルーの美しく長い尾を輝かせ、ニホントカゲの子どもがチョロチョロ歩き回る。果樹園のかんきつ類は花盛りで甘い芳香を暖かなやわらかい風に乗せる。あらゆる生物に生命力がみなぎり、生き物観察をするのが楽しくてたまらない。5月が半年くらい続けばいいのに、と、つい無理なことを願ってしまう。そんな中、恵みの雨は吸血動物ヤマビルを冬の眠りから呼び覚まし、活動を開始させる。新緑を目覚めさせる豊かな雨は、動植物にひいきをすることなく均等に恵みの水をもたらす。

屋久島のトレッキング中、最も出会いたくない動物No.1のヤマビル（池田調べ）。とにかくよく嫌われる。彼らは通常、ヤクシカの皮膚の柔らかい部分、例えば脚の指の間などに潜り込み吸血する。暖かい季節、雨で林床が湿った状態が彼らの好きなコンディションとなる。雨天のトレッキング時は、10人に1人くらいは、吸血被害にあうようだ。

こう書くと厄介な動物に思えてくるのだが、私はなかなか吸血被害にあわないし、特に嫌いでもない。忌避剤スプレーなどで対策をしているわけではないのだが、ヤマビルの習性を知り、彼らの行動パターンを予測すると吸血被害にあう前にキャッチ・アンド・リリースができる。過去4年で噛まれた回数はたった3回。うち2回は噛まれた瞬間に気づき、取り除いた。

大切なのは、敵を知ることにより対策を練る、ということ。

ヤマビルは素早い動物ではなく、ふつうは地面から靴を伝って「しゃくとりむし」そっくりの動きで、よじ登ってくる。したがってウェアの下に潜り込んでスネやふくらはぎなどの地肌に付くことが多い。目の細かい、山用のウールソックスやタイツなどを食い破ることはないので、そうしたものを着用している場合、何とおなか周りまで登ってくる。油断をしてはいけない。へそ周りを吸血される人が多いのはこのためだ。

では、シャツをズボンにタックインしていたらどうか。なかなか良いアイデアではあるが、ヤマビルはさらに人体をよじ登り、首回りや頭部まで登ってくる。彼らは物陰に隠れるのが好きなようで、首にタオルを巻いていると、その中に潜り込んで血を吸う。首タオルは雨天時には要注意。

このように全身にわたり、細かく気配りをしないと、いつヒルの攻撃に会うかわからない。一番油断してはならないのが、休憩をしようとしてバッグを地面に下したときにくっついてくる場合だ。再出発時は毎回ヒルチェックを推奨する。また、トレッキングポールに着いてきて、手の指の間を攻撃された人もよくいる。ただし噛まれたとしても、シャープペンの先でチョン、くらいの痛みしか感じない。敏感な人は、じっとしていれば気づく程度だが歩行中はまず気づかない程度の刺激である。

ちなみに高い木の枝から落ちて来る、とか勢いよくジャンプして飛び移ってくる、とかいう話も聞くが見たことがない。おそらくヒルが怖い人が作ったデマだろう。サルにくっついたヒルが落ちて来る、なんて可能性はあるだろうか。

総じて対策としては先述のようにタイツ着用がスタンダードだが、基本的には「見つけたら除去」というのがもっとも有効な作戦だ。くっついてすぐ吸血するのではなく、まずは吸血をしやすい場所に移動するので、肌や服の上を尺取虫のように移動しているのを見つけたら、手でつまんでポイ。ヤマビルはアルコール成分や揮発性のオイルなどに弱いようで、私たちのツアーでは消毒用エタノールやハッカオイルなどで対応しているので安心してほしい。芋焼酎「三岳」を振りかけたところ、ヒルは悶絶してはがれ落ちたケースもある。私よりアルコールに弱いらしい。ちなみに、日本のヒルに噛まれたとしても、重大な感染症に至る、というケースは無いようだ。たいして怖いものではない、というのが実態である。蚊のほうがよっぽど危ないかもしれない。

今年になって、ヤマビルにあまり噛まれたことのない私が、実験的にヤマビルを自分の腕につけてみたところ、腕毛のふさふさした部分がとても歩きにくかったようで、もがいた末に滑り落ちた。腕毛も有効な対策であるようだ。なかなかヒル攻撃にあわないのはこのためか。なお、仕切りなおしてみたところ、2時間も血を吸い続けた(写真1)。吸血中は決して引っ張らずに、アルコール等を塗って、剥がれるのを待つとよい。患部は、ヒルジンといわれる血液凝固を妨害する物質の作用により、血が止まらず沁みだしてくる。Tシャツや靴下などが血だらけになって、ヒルの被害に初めて気付くのはこの作用によって血がなかなか止まらないからである。噛まれた痕は清潔な水でよく洗うこと。

ちなみに私は繊細そうな見た目通り、敏感肌なので、吸血された部分が10日間腫れた。

われわれ現代日本人は人が作った物を食べ、人が作った街で暮らし、死んだら人が作った装置で焼かれて灰になる。すなわち「食物連鎖」の輪から外れている。まるでバーチャルリアリティの世界に生きているかのように自然との関わりが希薄である。屋久島でヤマビルに血を吸われる、ということは本当の自然の中の食物連鎖の1部に「ちょっとだけ」入ること。1年に1回くらいは血をあげてもいい、かな。

【ウミガメかわいい法則の話】

屋久島では5月半ばから7月まで、アカウミガメが上陸し産卵が行われる。この時期、ウミガメの産卵を見たい！という旅行者が後を絶たない。

ウミガメは野生の爬虫類である。ヘビやトカゲ、ワニなどは一般的に嫌われる爬虫類だが、ウミガメだけが特に人気者の理由はなんだろうか。実は私は大の爬虫類好きでカメやワニやヘビは分け隔てなく好きだ。爬虫類嫌いの人の気持ちが全然わからないのだが、ここはマニアの視点も交えて真面目にバカな考察をしてみよう。

★文化的要素

ウミガメは日本の昔話、浦島太郎に登場する。浜で子供らにいじめられ、太郎君に助けられる。とても弱いイメージを持っている。たしかに、ウミガメは完全水生の体の構造をしているため、上陸した場合、活発に動き回ることができない。ずりずりとしかはい回ることができない。こうしたイメージから、攻撃的ではないイメージが我々の脳内に刷り込まれたのだろう。大好きなジャンプ漫画「ドラゴンボール」にも亀仙人(武天老師)に仕える温和なウミガメが登場する。

また、鶴は千年・亀は万年といわれるように長寿の縁起物として祀られる。おめでたい生き物、というイメージもあるだろう。

★形態的要素

【意外とかわいい顔】

カメは爬虫類で唯一、歯(牙)がない。ヘビやトカゲやワニなどは、鋭い歯をもつものが多い。カメはすべて嘴をもつ。鋭い牙などがあれば、攻撃的で「怖い」印象を受ける。それがカメには無いのだ。怪獣ガメラは歯を持っていてコワモテでかっこいいが、現生のカメは全種が歯を持たない。

また、頭部には大きな目をもっており、両目が離れてつき、特にウミガメは黒目がちで、なかなか可愛らしい印象を受ける。カメの中には鋭い目つきをもつ種類もいるのだが、ウミガメは全体的にかわいらしい。今度機会があったら、カメの顔をよく見てほしい。

【危なそうでない、ボディ】

カメは甲羅をもっており、全体的にどっしりと、のろまな印象だ。とても素早い動きで襲ってくるようには思えない。実際には俊敏な種もいるのだが、例外的。また、攻撃的な種類も少なく、どちらかというと臆病である。人に向かって積極的に攻撃をする、という種がいないのも、安心感を与える。

ウミガメに限って言えば、脚が船のオール状になっており、鋭い爪をもたない。また、手足は短い。これも攻撃的でない印象を与える大事な要素だろう。水中では危険を感じた時にとても俊敏に泳ぐことができるが、普段は優雅に泳いでいる(写真2)。

例えばカメが甲羅を持たず、細長い筋肉質の手足をもち、その先に鋭い爪でもあれば、誰もかわいいとは言えないだろう。危なそうな体つきをしていないのが、カメの平和的なイメージを作り出している、といえる。

★★まとめ★★

・頭が大きく、鋭い目つきでない。両目が離れており、怖そうな顔ではない。牙をもたない。

・脚が短く、甲羅がどっしりとしたのろまな印象を与える。そして体の割に頭部が大きい。

こうした条件がそろうと、あるものとの共通点が見えてくる。ドラえもんや、ゆるキャラなどのデザインと似ているのだ。ゆるキャラに牙や鋭い爪、筋肉質の細長い体系をもつものはいないだろう。例えばアンパンマンに出てくるバイキンマンは牙やツノ？があるが、ぎりぎりかわいいタッチで描かれている。二頭身ボディや手足の短さなどが重要なキーとなっている。漫画などで描かれるウミガメは、三頭身くらいで特にかわいらしい印象を受ける。生まれながらにゆるキャラ風のデザインといえるだろう。

ウミガメ≒ゆるキャラ＝かわいい。 こうしてウミガメかわいい法則が証明された。

昨今のゆるキャラブームで食傷気味だったが、屋久島にもゆるキャラがいたのだ。それも、自然に生きる爬虫類であるウミガメが、それを担っていた。

＊＊＊＊＊

なお、野生の爬虫類であるウミガメは、人間が近づくことを大変嫌います。特に産卵時期は大変神経質になっており、産卵見学などせずにそっとしておくのが本当の優しさです。女性の方なら想像つきますね？

ウミガメになるべくストレスを与えないように観察するには、スキューバダイビングや、スノーケリング、あるいはシーカヤックなどがおすすめです。海の中であれば、彼らは自在に泳ぐことができ、人によるストレスは極力抑えられるだろうと考えます。屋久島はウミガメ遭遇率が高いので、実際に見てみたい方は、海のツアーにぜひご参加ください。

ハワイではウミガメは「幸せを運んでくれる守り神」だそうです。海の中、カメの世界に国境などありません。屋久島の海でウミガメに出会えたら、きっと幸せになりますよ。

(写真1) 池田の上腕部にヤマビルに吸血させた様子。ふさふさした腕毛はヒルにとって歩きづらいらしく、何度も滑り落ちた。野生のシカはもっと毛があるので、毛におおわれた部分は吸われないのだろう。

シャツに挟まれると体が安定するようで、しばらくすると吸血を開始した。はじめは小豆大だったヒルも2時間の吸血後にはアーモンド大に。

腕毛のおかげか、普段ヒル被害にほとんど合わない私は今回のこの研究は大変参考になったが、もう二度とやらないのは言うまでもない。

(写真2) スノーケリング中に出会ったアオウミガメの亜成体。甲長40cmくらいか。私から3mくらいの距離を泳いでいた。水中をゆったり泳ぐウミガメは優雅で見とれてしまう。何度でも会いたい海の生き物である。

屋久島でのスノーケリングツアーでは遭遇率は50%、ファンダイビングなら場所によって90%以上は狙えるかも。ただし、私たちがいくら会いたがっても、当のウミガメは人間が近づくことを嫌う。

屋久島の海の中でよく出会うウミガメは、アオウミガメの若い個体(亜成体)。しかし5月、6月に産卵にやってくるカメのほとんどがアカウミガメの成体だ。アカウミガメは、深い場所やちょっと沖合にいるので、スノーケリングツアーではまず、出会うことはない。

ウミガメの仲間は今からおよそ6,500万年前、恐竜が大絶滅した時代を難なく生き延びて現代にいたる。エネルギー代謝の低さが、大絶滅時代を生き抜いた秘訣だろう。

Calendar・2014-15

2014

7/2,3 自由の森学園修学旅行受け入れ

7/2 小原 龍谷大学にて講義

7/3 小原 銀座好日山荘にて講演

7/9,10 台風8号の影響で屋久島高校インターンシップ中止

7/19-22 春日部高校・茗溪学園実習講師

7/20 神戸私立保育園研修旅行受け入れ

7/24,25 四万十高校実習講師

7/30-8/1 岡山理科大学教員免許更新講習

8/6 口永良部島新岳 34 年ぶりに噴火 噴火警戒レベル 3

8/19,20 岡山理科大付属高校実習

9/1-5 岡山理科大学エコツーリズム技法実習

9/11,12 松本 富山県上市町立山ガイド講習会講師

9/17 立教大学観光学部桝谷ゼミ実習講師

9/27,28 松本 旅博にて YNAC ブース営業

10/4-6 東京環境工科専門学院スノーケリング実習

10/5 台風18号で艇庫の電線が切れ衛星アンテナが飛ぶ被害

10/9 山の神祭り 益救神社でお祓い

10/15,16 鳥取東高校研修旅行受け入れ

10/28-30 松本 JTB 財団へ出張

11/7,8 松本 岡山エコツーリズム講習

11/23,24 松本 愛媛県久万高原ガイド講習会講師

11/29 松本 JES 学生シンポジウムで基調講演

12/5,12 市川 ネクスト屋久島の講習会で栗田さんと出会う

12/15 松本 JES 理事会

12/16 松本 環境省ガイド講習会事前打ち合わせ

2015

1/18 池田 東京にて移住フェアに参加

1/19 MTB 一湊ポタリングツアー開始

1/22-27 小原 台湾自主研修

1/23 松本 愛媛県松野町にてエコツーリズムの講演

1/23 栗田氏来訪 ネット広告の指導を受ける

1/28-30 松本 環境省ガイド講習会 水上町 事務局兼講師

2/2-4 松本 環境省ガイド講習会 大山町 事務局兼講師

2/10-15 松本,市川,小原,池田 日本山岳ガイド協会講習会参加

2/21 松本 京都にてミリケンフーズ依頼の講演

2/23 愛媛森の国ネット ツアー視察

2/25-27 松本,淳子 環境省ガイド講習会 水上町 事務局兼講師

2/28-3/2 小原 富士山シンポジウムに参加

3/1-3 松本,淳子 環境省ガイド講習会 大山町 事務局兼講師

3/12 小原 大阪梅田好日山荘で講演

3/15 小原 只見ガイド講習会講師

3/16 松本 屋久島観光協会会長に就任

3/17 小原 屋久島高校環境コース白谷実習

3/23 水上町山岳トイレ視察受け入れ

5/2 樫村 長女佳苗ちゃん誕生

5/9-12 キャラバンサライツアー8 名受け入れ。無何有頂きました。

5/22-24 BAJA 横浜ツアー17 名受け入れ。アメリの窓が・・・

5/29 口永良部島再噴火全島避難へ 噴火警戒レベル 5

Contents

巻頭言 水に流す	市川 聡	1
私と口永良部島	松本 毅	2
これは誇りです	松本淳子	4
屋久島のかからん団子	福留千穂	5
妄想ひとり旅@グアテマラ共和国	渡部 幸	6
遣唐使と屋久島	小原比呂志	8
台風史の謎:神風は2度吹いたか?	佐野良介	11
いつの日か誰かの庇に	樫村精一	12
蟲部 2 ヤマビルとウミガメ	池田裕二	13

6/8 松本,池田 銀座好日山荘にて講演

6/13 小原 鹿児島好日山荘にて講演

6/26 松本 屋久島観光協会会長に再選

執筆・取材記事

・**サルとシカの不思議な関係**（市川） 屋久島のアニマルウォッチング入門ということで、サルとシカの暮らしを紹介。屋久島ブック 2015p36-37 山と渓谷社

・**照葉樹林の森を行く**（市川,渡部）市川ガイドの西部照葉樹林を大沢カメラマン、渡部幸モデル、岡村朱万里文で紹介。屋久島ブック 2015p67-70 山と渓谷社

・**愛子岳**（樫村）ガイドのおすすめ情報を交え愛子岳のコースガイドを担当。屋久島ブック 2015p90 山と渓谷社

・**ゆっくり歩いて見えてくるもの～屋久杉が教えてくれること**（市川） 屋久杉の森の IE ツアーを誌上で展開。ワンダーフォーゲル 2015 4 月号p135-137

・**屋久島のエコツーリズムとごみ**（市川）全くの門外漢ながら「観光とごみ」という特集記事に屋久島のごみと山のし尿処理問題について執筆。廃棄物資源循環学会誌 Vol.26,No3,p183-190,2015

・**職場体験完全ガイド 43 気象予報士・林業作業士・海洋生物学者・エコツアーガイド**（渡部）子ども達に人気の職業ということで、初めてエコツアーガイドが取り上げられ、渡部が仕事の様子から 1 日の行動まで密着取材を受けました。 p35-46 ポプラ社 2015

・**JTB機関誌『観光文化』224 号特集企画の座談会**（松本）

・**JES会報No64 巻頭インタビュー**（松本）

編集後記

☆やっぱり観光協会会長になってしまいました・・・・。(た)☆口永良部島の避難者に家電等寄付しました(ゆ)☆姿勢の悪さを再実感。残りの 60 年のために正しい姿勢を保つよう心掛けはじめました。(さ)☆梅雨の雲の切れ間が美しい。白雲が山々を渡り、緑の峡谷には幻の滝が幾筋も落ちる。(り)☆ YNACカフェの指導シェフ曰く「素人だからこそ冒険ができる」。鹿肉丼・鹿肉カレーレシピ決まりました。(じ)☆野の花を見ていると、目立たなくてもちゃんと花を咲かせてる姿に、励まされます。私も・・・！(ち)☆夏だ、がんばろう(い)

YNAC 通信（ワイナックつうしん） NO.32

発行日:2015 年 7 月 1 日

発行:㈲屋久島野外活動総合センター

住所:〒891-4205 鹿児島県熊毛郡屋久島町宮之浦 368-21

TEL 0997-42-0944 FAX 0997-42-1850

E-mail:forest@ynac.com URL:http://www.ynac.com/

Facebook http://www.facebook.com/Ynacyakushima